



第 11 回

戦後フィギュア界の先導者

平松純子

(旧姓・上野)

hiramatsu jyunko

早いもので、ソチ冬季オリンピックまであと1年を切った。3年前のバンクーバー大会では、フィギュアスケートは浅田真央選手が銀メダル、高橋大輔選手が銅メダルを獲得という大活躍を見せた。日本でのフィギュアスケート人気はとどまることを知らず、ソチ大会でも大きな期待を寄せられている。

昨年、NHK杯の男子シングルショートプログラム(SP)で、羽生結弦選手が95.32点という「世界最高得点」をたたき出した。2002年のソルトレークシティ大会までは6点満点で採点されていたが、ペア競技の不正採点疑惑により採点システムは大きく変革を遂げた。その際にISU(国際スケート連盟)の技術委員としてかかわったのが平松(旧姓・上野)純子さんだ。オリンピック2大会に出場し、1998年の長野大会では審判員宣誓も行った平松さんにお話を伺った。

聞き手/西田善夫 文/山本尚子 構成・写真/フォート・キシモト

フィギュアスケートを本格的に始めたのは10歳から

— フィギュアスケートを始めたのはおいくつのおときですか。

私は遅かったのですよ。10歳からでした。神戸に住んでいるのですが、6~7歳のころは、冬に六甲山の池が凍ると、スケート選手だった母(上野衣子さん)に連れられてシーズンに2~3回は滑っていたようです。でもそれは単なる遊びでした。10歳になったばかりのとき、母達が熱望していた屋内スケートリンクが関西の数カ所に完成し、その一つ「阪神アイスパレス」は私の家のすぐ近くでした。その日から、私のスケート人生が始まったといっただいでしょう。



J.B. ジョイス氏(USAのスケーター)と共に。左端が上野衣子。右から3人目が上野(平松)純子(1954頃)

— お母さまの上野衣子さんは、女子フィギュアスケートの先駆けといわれる稲田悦子さんと同じ時代を過ごされた元フィギュアスケーターであり、日本女性初の国際審判員もなされた方ですよ。

はい、今も健在で93歳です。

— ご健在ですか。どうぞよろしくお伝えください。平松さんはやや遅いスケートのスタートではありましたが、手ほどきはお母さまですか。

そうです。母は私をフィギュアスケートの選手にしようと目論んでいたのでしょうか。スケートの「ス」の字も言わないまま、でも6歳からバレエのレッスンに通わされていました。

稲田悦子さんに師事

— 稲田悦子さんは1936年のガルミッシュ・パルテンキルヘン・オリンピックに12歳で出場した方ですが、その稲田さんに師事されたそうですね。



ガルミッシュ・パルテンキルヘン冬季オリンピックに12歳で出場した稲田悦子(1936)

ええ、もう天才少女という言葉がピッタリの方で、稲田先生は母より5歳年下でしたが、

母は1度も勝つことができなかったそうです。私は母がコーチでしたが、親子は駄目というか難しいのですよ。母はそれをわかっていたので、月に4回だけですが、大阪にレッスンに来ていた稲田先生に見ていただきました。夏休みには私が東京に行きました。

— いろいろと技術面の指導を受けたわけですか。

技術だけではありませんでした。私はものすごく気が弱く、恥ずかしがり屋だったのです。練習中、整氷の時間、選手はみなクラブ室で休憩するのですが、私はいつも隅っこにしているような子どもでした。そんなときに、そんな精神力では国際試合で通用しないと思われたのか、「純ちゃん、こっちに来なさい」と真ん中に引っ張り出されることもありました。経験豊富な方ですので、どんな曲を使うとアピールできるかなどいろいろ指導していただきました。福田先生なしでは、今の私はあり得ません。

13歳で全日本選手権に 初出場初優勝

— 本格的にスケートを始めてわずか3年半、13歳で全日本フィギュアスケート選手権(1956年)に初出場して初優勝されたのですよね。



母にレッスンを受ける
上野(平松)純子(1953)



全兵庫選手権に優勝(1955)

私はラッキーでした。フィギュアスケーターだった母親の存在もありますし、何よりアサヒアリーナなどリンク事情に恵まれていたことが大きかったですね。それが、あの当時、関西の選手が強くなった大きな要因だったと思っています。

— そうでした。フィギュアスケートといえば、「関西のスポーツ」でしたよね。

福原美和さんは私より2歳若くて、私より1~2年早く始めていらしたのですが、私のほうが環境的に恵まれていたこともあり、あれよあれよという感じで、誰もが驚く初優勝となりました。

竹田恒徳 日本スケート 連盟会長と社交ダンス

— 翌1957年に世界選手権がありましたでしょう。

米国のコロラドスプリングスでした。今なら考えられませんが、私はそれが初めての国際大会でした。そのときの団長が、当時、JSF(日本スケート連盟)の会長でいらした竹田恒徳さんです。現在の竹田恒和JOC(日本オリンピック委員会)会長のお父さまです。あのころは羽田空港からプロペラ機でのフライトでした。竹田恒徳会長は元宮様ということもあり、空港内の特別室でお会いしたことがありました。5人のお子様を連れていらして、その中に5人兄弟の末っ子、現JOC会長もいらっしゃいました。中学2年生だった私より5歳年下ですから……。



日本スケート連盟の会長を務めた
竹田恒徳氏

— まだ小学生の「恒和ちゃん」だったのですね。

そうそう。私はお父さまに可愛がってもらいました。コロラドスプリングスには、USOC(米国オリンピック委員会)のオフィスがあります。最初、日章旗は端のほうにあったのですが、だんだんとその位置が真ん中になっていったと母は言っていましたね。

— 待遇がよくなったと?

ええ、現地には日系の方がたくさんいらして、もう大歓迎していただきました。フィギュアスケートでは、大会が終わると、バンケットがあります。今はかなり簡素化していますが、当時はとても盛大なものでした。私や荒木祐子選手、母たちも皆、着物を持参して着ました。お父さまの竹田会長は、私と社交ダンスをしてくださったのです。でも、私は着物姿ですし、ダンスなんてしたことがなく足をぶつかりしていました。

— 竹田の宮様はダンスがお好きな方でしたから。

そうだったのですね。



スコーパーレ冬季オリンピックで日本選手団の旗手を務める(1960)

初めてのスコーパーレ 冬季オリンピックで 旗手を務める

— 1960年、スコーパーレ冬季オリンピックで、初出場の平松さんは旗手でした。

私はまだ高校2年生の17歳。旗手なんてそれまではスポーツ界に貢献されたベテランの方がするものだったのに、非常に画期的なことだったと思います。女性だからそういうチャンスをいただけたのかもかもしれません。

— あのときはアイスホッケーと……。

あとはスピードスケートとフィギュアスケートで、女子選手は5人しかいなかったのです。フィギュアが福原美和さんと私で、スピードスケートは高見沢(現姓・長久保)初枝さん、鷹野淑子さん、浜文恵さんね。

— 懐かしいな。旗手は緊張しましたか。

すごかったです。当日はずっと大雪で。日章旗はものすごく重い。吹雪の中で待機しながら、とにかく無事に務めを果たさなければと、そればかりを考えていました。それが開会式が始まる直前、本当に素晴らしいお天気になったのです。開会式はウォルト・ディズニーの演出でした。もう50年以上前なのに今でも思い出せるぐらい真っ白な山があって、その谷間に万国旗がはためいて。各国のコスチュームがとてもカラフルで美しく映えて。でも私はとい

えば、日本選手団のユニホームはなんとスカートだったのですよ。

— 今ならスラックスなのにね。

ねえ、もう寒くて寒くて……。1960年の冬といえば、いまの皇太子さまがちょうどお生まれになったときでした。あのころの選手村は、男子棟と女子棟に分かれていましたが、みんなで広場で日章旗を揚げ、お祝いをしたというのもいい思い出です。

陰しかったインスブルック 冬季五輪までの道

閉会式は美しい夕映えの中で行われ、当時のIOC会長のブランデーさんの「4年後、再びインスブルックで会いましょう!」という声が響き渡りました。それを聞いて私は、「よし、絶対に次のインスブルック大会にも行くんだ!」と誓ったのでした。

— 17歳から次の21歳までは、どんな4年間でしたか。

もうこれ以上ないというくらい苦しく、中身の濃い4年間でした。私はいきなりチャンピオンになってしまったので、そこから急に追われる立場になり、しんどい思いをしました。福原美和さんというライバルと、ずっとしのぎを削り合いました。私が4連勝していたところで美和ちゃんに1回負けて、また悔しくて頑張って抜き返してという具合です。稲田悦子先生は美和ちゃんも指導されていたので、そうやってライバル意識に火をつけて、お互いを高めるように仕向けてくださっていたのかなと思ったり。そこにまた、大川(現姓・佐藤)久美子さんという強敵も出てきて、根性も鍛えられたと思います。

— 大川さんというと、佐藤信夫コーチの奥様で、佐藤有香さんのお母さまですね。



スイスのピラーールで開催された冬季ユニバの表彰式(中央)(1962)

スケート人生に 大きな影響を与えた カナダのサマースクール

— そのころ、3カ月ほど、スケート留学をされたそうですね。

1963年の世界選手権はコルチナダンペッツォ(イタリア)での開催でした。それが終わったあと、その足でカナダへ練習に行きました。カナダといえばフィギュア界ではトップクラスの国です。そのときは1カ月足らずでしたが、あらためて大学の夏休みを利用して、3カ月強ほど、親に無理を言って行かせてもらいました。一人でホームステイして、食事もつくって、環境も練習も何もかも日本と違いました。そんな日々が、私にとっては大きなターニングポイントとなりました。

— どんな毎日でした？

あのころはコンパルソリー(規定種目)があったので、朝6時ごろからずーっと滑っていました。中身もとても充実していて、コーチはカナダ人で、多くのチャンピオンを育てた方。北米のトップ選手もたくさん来ていて、私はその中にぼーんと放り出されて過ごしたわけです。

— 英語はそのころから得意だったのですか。

いえ、それほどでは。ただ、私が通っていた学校は私立で、週1~2回でしたが、小学校低学年から、「遊びながら英語を学ぶ」という時間があったのです。中学2年で初めて世界選手権に行ったときは、英語の先生に「最低限、これだけは覚えておきなさい」というのを教えてもらいました。あいさつ、食事のオーダーなどといった基本的なことですね。そういう下地はありましたが、大学生でカナダへ行ったときは、「やはり言葉ができないと駄目だな」というのは痛切に感じました。

スケート先進国で 学んだこと

— ほかに何かカルチャーショックのようなものはありましたか。

日本ではバジジテストといって、初級から8級まで検定試験のようなものがあります。カナダで驚いたのは、選手が16歳になると希望者にはそのバジジテストのジャッジをさせるのです。

— 選手がジャッジを……？

はい。当時は、ルールブックを持っている選手というのはあまりいないと思います。でもジャッジをするにあたり、自分の頭にルールをたたき込まなければいけませんから、カナダでは選手のロッカールームにはルールブックが入っていましたね。ルールを細かく知ることによって、自分の滑りにも活かすことができます。当時、女子の競技でも女性ジャッジは本当に数人しかいませんでした。それがカナダでは女性ジャッジが多くいて、やはり日本とは違うなと感じました。



コルチ・ダンペッツォで開催された世界選手権にて(1963)

— お母さまはその数少ない一人だったのですね。

母はそうですね。私が初めて出場した世界選手権では、ジャッジ9人のうち女性ジャッジは2人。そのうちの1人がカナダの方でした。黒髪に真っ赤なコートがよく似合っただけで実にカッコいいなと思ったことをよく覚えています。

— そういう発見や勉強をされたというのは、あなたのその後の審判やISUでのお仕事を考えると、非常にいい経験でしたね。

そうですね。あのカナダの夏の練習がなければ、この道に進んでいたかどうかわかりませんし、これほど長くスケートに携わることもなかったかもしれないと思います。



長野オリンピックで審判員宣誓を務める(1998)

長野オリンピック開会式で 審判員宣誓

— オリンピックに2大会連続出場をされたあとは、
どうされましたか。

1964年のインスブルック大会のあとに現役を引退しました。1年間は普通の学生生活をおくり、卒業してすぐに兵庫県のスケート連盟で専門委員に登録して、ジャッジ生活がスタートしました。そこから、少しずつ上の資格を取っていくのです。1971年に国際審判員になり、1975年にISUチャンピオンシップジャッジになり、1988年にISUレフリーになりました。国際ジャッジといっても、当時は今のように国際試合は多くはありませんでした。ですから、海外で初めてジャッジをしたのは、1973年のスケートカナダでした。

— お母さまは1972年の札幌冬季オリンピックで、
日本女性初のアシスタントレフリーを務めましたね。

はい、私の場合は母がその道にいましたので、そのあとを追いかけるかたちでした。

— 1998年の長野冬季オリンピックでは、平松さん

がアシスタントレフリーをされて、審判員代表として開会式で宣誓もされました。親子二代で地元のオリンピックでアシスタントレフリーというのも珍しいですね。

本当に。

フィギュアスケート隆盛の きっかけはNHK杯

— その後、伊藤みどりさんが出現して、そして今、
これほどたくさんの方のメディア露出があって、スポーツファンにとってはフィギュアスケートの放送は
あって当然という感じ
ですよね。この発展についてはいかがですか。

西田さんがNHKのアナウンサーだったので申し上げるわけではありませんが、NHK杯が大きなきっかけです。札幌オリンピックのあと、1977年に東京で日本初の世界選手権を開催。そこ



アルベールビル冬季オリンピックで銀メダルを獲得した伊藤みどり(1992)

で佐野稔さんが、日本選手として始めて表彰台に乗りました(3位)。1979年のウィーンの世界選手権では、渡部絵美さんが3位になりました。

— そう、佐野さんに絵美ちゃんだ。

その年の11月、JSFの50周年を記念して、NHK杯を国立代々木競技場で開催していただくことになりました。それ以降、NHK杯は毎年開かれ、今は6戦あるグランプリシリーズのうちの1戦に位置づけられています。このNHK杯が、現在の日本フィギュアスケート界の礎を築いていると思うのです。NHK杯が誕生したことで、日本の選手は国際試合に出場することができる。海外から選手に来てもらえる。国際試合を運営することで、JSFの役員育成にもなりました。

NHK杯はアジアの フィギュア発展にも寄与

— 1979年の世界選手権は、ジャッジとして参加されていたのですか。



ISU 総会会場にて(2006)

はい、ウィーンでの大会でした。牧野呂(まきの・ながし)さんという、当時NHKチーフプロデューサーだった方が中心となってNHK杯開催に動いてくださっていたのですが、私たちはそのPRのお手伝いをしました。

— 牧野さんね、慶應大学アイスホッケー部の主将だった人で、NHK入局後の冬季競技への貢献は

それは大きなものがありました。そして私にとっては、アイスホッケーの実況に抜擢してくれた大恩人です。

そうでしたか。ウィーンではNHK杯 広報のためにパーティーが開かれましたが、その招待状の宛名書きをしました。私も既にISUの関係者に顔や名前を覚えていただいていたし、現役時代に一緒に試合に出ていた人たちも各国から役員で出てきていました。

— NHK杯は、はじめのうちはそれほど強い選手は来てくれなかったのですよね。

それでも、あのころに中国や韓国の選手を招きましたよね。当時はフィギュアスケートはヨーロッパに根付いたスポーツで、北米でも盛んで、でもアジアでは日本だけという状況でした。その意味で、JSFとNHK杯は、アジアのフィギュアスケートの発展にも寄与できたと思います。

フィギュアスケートの実況の 基本は、映像を第一に

— 最初は一国際試合に過ぎなかったNHK杯がグランプリシリーズの一環となり、今は視聴率も高いですね。私は冬季オリンピックの実況ではアイスホッケーを担当していましたが、ときどきフィギュアスケートのアナウンサーの穴埋めをしなければならない場合があります。ペアやアイスダンスを担当しましたが、その放送の研修で指導してくださったのが平松さんでした。

もう恐れ多いです。

— 今でも覚えているのが、「長くしゃべらないできちっと簡潔に話してください。それでわからなかったら、解説に聞いてください」ということでした。

私、そんな生意気なことを言いましたか。

— 「フィギュアは映像が一番面白い。お話は、とにかくその演技の映像が止まってから」ということ

を、平松さんは遠慮がちにアドバイスしてくださったのが非常に印象に残っています。1992年のアルベールビル・オリンピックのときだったか、顔なじみのアメリカのアナウンサーと一緒にになりましてね。「オリンピックでアイスダンスの実況をするのは初めてなのだけれど、秘訣は何か？」と尋ねたら、人差し指を口元に持って行って「シーツ」というポーズ。要は、「黙っていればいい」というわけですよ。滑っている間にしゃべりすぎると、興味を削がれてしまう。平松さんがおっしゃったことと同じでした。ですから平松さんには非常に感謝していますよ。

いえいえ、私こそ。フィギュアスケートのファンがこのように増えたのも、テレビや紙媒体でのメディアの方たちのお陰です。今は選手が素晴らしい成績を挙げるからマスコミの方が取り上げてくださって、というようにお互いに関係ですが、やはりマスコミの力はすごいなと思います。

ネーム・バリューに 左右されない新しい採点法

— 審判については、昔から「えっ」と思う部分が随分ありました。社会主義国家が優勢だったころは、その国の選手達が有利になったり。ファンとしてはそういうものを見せられると、砂をかむような思いがしたものです。採点競技の場合は特にそうです。フィギュアスケートでは、2002年のソルトレイクシティ大会をきっかけに、新採点システムが採用されることになりました。不確かさが解消され、新しい方式により、選手たちが正當に評価され、競技力がどんどん上がっていく中で一つの安心感になっていますね。

そう思ういただけると非常にありがたく思います。というのは、北米の古いファンの中には、まだ6点満点システムにノスタルジーを感じている方がいらっしゃるのです。旧採点法では順位点というのがあって、どのジャッジがこの人に1番を出したとわかりやすかったのです。私はたまたま新採点法を構築する時期にISUの技術委員に選ばれ、本當に一からの積み重ねでした。これだけ技術が高度化してくるとグレーゾーンも出てくるのですよ。例えば4回転ジャ



ソルトレイクシティオリンピックで男子の審判団と（前列右から2人目）(2002)

ンプ。クリーンなプログラムを滑らせたコーチは、「やめておけ」と指示する人もいます。ところが、「ダメもとで」と選手に飛ばせるコーチもいるわけです。旧採点だと「やり得」な面がありました。しかし今では、1/4～1/2回転足りない、UR（アンダーローテーション）といって、4回転ジャンプの基礎点の70%の得点になります。それより足りないと、DG（ダウングレード）といって、3回転ジャンプと見なされます。

— つまり、選手のネームバリューは関係なしに、よりスポーツ的に加点、あるいは減点されるということですね。

厳しい採点システムで選手の レベルは飛躍的に上がった

西田さんのようなずっとスポーツにかかわってこられたベテランの方が、そのように見てくださるのは非常にうれしいことです。「わかりにくい、前のほうがわかりやすかった」という不満の声もあることはありますが、でもだいぶ定着してきたと思いますね。



オランダで開催されたISUのシングル&ペア、アイスダンス技術委員会（右から3人目）(2004)

— あれをみんなが理解できるように説明するには、時間がいくらあっても足りませんよね。ですから、人の意思がそれほど加わらない採点方式への「信頼度」が重要でしょう。

まあ、採点法が変わったあと、技術が驚くほど進歩したのは明らかですね。例えば2002年のソルトレークシティ大会の男子シングルで優勝したヤグディン選手（ロシア）と今のトップ選手の映像を比べてもらうとものすごく差があるわけです。

— どのような？

例えばスピンです。今は技術点がものすごく細分化されているので、ポジションを変えながら行なうスピンでは、一つのポジションとして認定されるには2回転はしなければいけないとか。ステップ一つとっても要求されるレベルは高く、選手の負担は増えました。以前なら、スピンの間にちょっと「休む」ことができました。しかし、今はコネクティングステップ（主要な技の間をつなぐ滑走動作）とか、つなぎの部分も全部評価の対象なので休んではいられません。演技構成点のほうも、スケートスキル、トランジション（つなぎ）、パフォーマンス（演技力）、コリオグラフィ（振り付け）、インタープリテーション（音楽の解釈）と5つの分野から採点されるので、選手には非常に酷な採点といえます。審判員のほうもそれに伴い、レベルを上げていかなければなりません。

— 選手や審判にとっては以前よりずっとハードルが上がりましたが、その分、フィギュアスケートファンの方にはより高いレベルで楽しんでいただけるということですね。

人材の継承の枠をもっと広げたい

— フィギュアスケートというのは、一流選手がそのままコーチになっていますね。佐藤有香さんもそうでしょう。ご両親の佐藤信夫さん、久美子さんもそうでしょう。

あそこはもうフィギュアスケート一家で、お子さんの有香さんは世界チャンピオンという理想的なかたちですね。

— そういうものを見ていくと、エリート選手だった方が引退してコーチという難しい仕事に就いて選手を育て上げていくという“継承”が上手にできているスポーツだだと思います。それと同時に、もっと広がっていかねばいけないのではないかと、いつも感じています。

まさにおっしゃるとおりです。福原美和さんもコーチの道を歩まれた。私と母は、審判、連盟の役員という地味な形で残った。これ、コーチの仕事もJSFにかかわる仕事も両方とも必要なものです。ただ、こういう続き方は、言い方を変えると「狭い」のです。そこはもっとJSFとして考えていかなければいけない課題です。

— コーチの方たちの組織というのはどうなっているのですか。

「日本フィギュアスケートインストラクター協会」という団体はありますが、JSFとは別組織なのです。インストラクターの方は、基本的に皆さん一国一城の主です。競技レベルが高度化するにつれ、指導も細分化して、先生方はグループ指導でないと対応しきれないようになっています。一人の選手を海外遠征に連れていく間、国内の他の選手はどうなるんだという話にもなりますし。



2013年2月に大阪で開催された四大陸選手権では、表彰式のプレゼンターを務める（前列右）(2013)

より良い組織作りが 選手強化につながってゆく

— JSFとインストラクターの方たちとの連携の問題がありますね。

この部分を、JSFとしてもっと連携を強化していけないものかと考えています。連盟は連盟で、もっと国際化に対応しなければいけないというテーマがあります。ISUでは、技術委員会に理事会の指名で、コーチ代表と選手代表に入ってもらおうようになっていきます。今、JSFでは、理事にインストラクター協会の佐野稔さんと、トリノ冬季オリンピックの金メダリスト・荒川静香さんに入ってもらっています。



アテネオリンピック壮行会にて。三宅義信氏（前列左から2人目）、河西昌枝さん（後列左から3人目）等と（本人は前列右）（2004）

— よい組織作りをすることが選手の強化につながっていくのですね。セカンドキャリアについての取り組みはいかがですか。

セカンドキャリアについては、フィギュアスケートの場合、トップ選手はそれなりに機会をもらえたり、オファーがあります。問題はそのレベルよりもう少し下の人たちですね。引退後の人生のほうが長いわけですから、どうすれば自分の人生設計を持ちつつ、選手生活をおくってもらえるのか。意識の高い選手ですとそのあたりを見据えています。そういう選手ばかりではありません。JSFでももっと啓発していかなければと思うものの、大きな競技団体さんならそういうケアまで行き届くのでしょうか、私たちはまだそこまでの余裕がありません。ですから、JOCのセカンドキャリアのプロジェクトは、とてもありがたいと思っています。

ソチ冬季オリンピックへの展望

— さて、ソチ冬季オリンピックまであと1年です。フィギュアスケートには大きな期待がかかっています。

ソチでも、バンクーバーに続いてもちろんメダルを狙っています。まずは、今年の世界選手権で出場枠が決まりますので、男女とも現状の最大枠である3枠を死守することが大事になります。

— それと、ソチ大会からは、個人競技に加えて団体戦が始まりますね。

はい。もうすぐ詳細が決まりますが、ランキングの上位10カ国が出場し、そこに日本が入るのは間違いありません。開会式の前から始まるということでコンディショニングが非常に難しくなります。とくに女子シングルは、大会の終盤ですので、だれを出すか、どのように臨むか、選手の希望も聞いたうえで戦略を立てる必要がありますね。

— 3月の世界選手権で、来季、そしてオリンピックの流れが見えてくるのでしょうか。

そうなると思います。今シーズンは、バンクーバーから頑張ってきたベテラン選手とジュニア年代から参戦してきた勢いのある若手選手がぶつかり合っています。

— 日本の男子でいえば、ベテランは高橋大輔選手、若手は羽生結弦選手ということですよね。



2012年全日本フィギュア選手権男子シングル優勝の羽生(中)、2位高橋(左)、3位無良(右)

そうです。日本だけでなく、男女ともその流れが見られます。世界選手権で趨勢をつかみ、あとはこの1年でどれだけ伸びるかですね。

— 日本の場合、代表選びがまた大変なのではないですか。

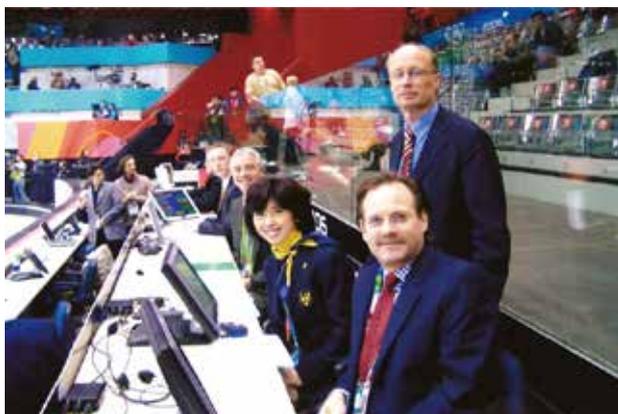
本当にそうです。うれしい悩みですが、ハイレベルの争いになるでしょう。また今年の12月には、グランプリ・シリーズの総決算であるグランプリ・ファイナルを福岡で開催します。そして、ソチ冬季オリンピック直後の世界選手権(さいたま)は日本で開催です。

— フィギュアスケートから本当に目が離せませんね。

2020年夏季オリンピック・パラリンピックを東京で

— 2020年夏のオリンピックをぜひ東京でという機運が高まっていますが、いかがでしょうか。

私は2016年の招致活動に少しかかわらせていただきました。私自身、スケートを始めたときから常にオリンピックを意識していました。そして冬季大会は日本で2度開催されましたが、夏季大会はまだ一度だけということで、ぜひ実現してほしいと思っています。私は1995年の阪神・淡路大震災で被災しているのですが、今回は東日本大震災からの復興という大きなテーマもありますね。2020年の東京オリンピックで、「スポーツの力」のすごさというものを発揮できることを願っています。



トリノオリンピックのペア競技。新採点法による技術役員 Team (前列)、ISU事務総長F. シュミット氏 (後列) と(2006)

— 1964年の東京オリンピックから、50年近くになりますね。平松さんは外国の方と接する機会も多いと思いますが、東京の招致の話題は出ますか。

できるだけ働きかけることを意識してはいます。またISUのチンクワンタ会長(イタリア)は、よく「日本を」と言ってくださっています。フィギュアスケートでも近年、アジアが非常に力をつけているということもあります。ウインタースポーツのシーズンは、私たちががんばることがオリンピック招致にもつながると思って取り組んでいます。

女性の豊かなスポーツライフのための環境整備を

— スポーツ基本法が成立して、どのように具現化していくかですが、平松さんはどのようなことを望まれますか。



スコーバレー冬季オリンピック。左が上野(平松)純子。右が福原美和(1960)

私は小さいときから個人ベースでスポーツにかかわってきました。基本法ができたことで、国として力を入れようとしていますよね。その中で、女性アスリートのサポートについても触れてくださっていることをとても心強く思います。

— 女性アスリートが増えてくるのは非常にうれしいことですね。でもこれが学生生活を終え、社会人として働き始めてすぐ終わってしまうのではあまり意味がありません。

そうなのです。女性はとくに、子育て時代は周囲の人に協力してもらわないと乗り越えていけません。でも競技で生計を立てているということであれば、理解を得られやすいかもしれませんが、ボランティアである場合、説得の材料としては弱いのです。子どもを預かってくださる人が見つから

ないとジャッジにも行けないし、会議にも行けません。そういう環境整備もお願いしたいところです。

スポーツ庁を創設し 女性パワーの活用を

— 日本の場合、女性へのバックアップがまだ足りない部分といえますね。そこで政治の力ということでスポーツ庁という話がよく出ますが、それについては？

絶対につくってほしいですね。私が今まで長くスケートにかかわってこられたのは、ラッキーな面が多々あったからだと思います。男性社会の理解も含め、女性の声をもっと吸い上げてもらえるようになってほしいですね。それからJSFは女性会長で橋本聖子さんが頑張っていますが、女性役員の数をもっと増えていくといいですね。オリンピックでは女子アスリートの活躍がめざましいところですが、あのパワーを選手の次元だけで終わらせるのではなく、その後もなんらかのかたちでスポーツに貢献していけるように、そのためにも是非、スポーツ庁の創設をお願いしたいものです。

— こうして平松さんのお話を伺っていると、意志の強さ、筋道を通す潔さ、そういうものを感じまし



アテネオリンピック日本選手団壮行会にて、JOC竹田会長(右)と(2004)

た。このインタビューシリーズでは、平松さんは田中(現姓・竹宇治)聡子さんに続いての2人目の女性ゲストです。

私は田中さんほど選手として実績を挙げておりませんが、

— いえ、ISUでのご活躍を考えたら、平松さんは日本が生んだフィギュアスケートの世界チャンピオンですよ。その自信は持っていただきたい。今後も楽しみにしています。

はい、ありがとうございます。

スケートの歴史

1920 大正9	フィギュアスケート愛好者たちにより 日本スケート会が結成	1951 昭和26	スピード・フィギュア共に戦後初めて 世界選手権に参加し、内藤晋が500mで優勝 1951 安全保障条約を締結
1924 大正13	スピード・フィギュア・アイスホッケーの 全体的発展を目指して、全国学生氷上競技 連盟が結成	1954 昭和29	第48回男子世界スピード選手権を札幌で 開催。他の競技も含めて、日本で最初の 世界選手権大会 1955 日本の高度経済成長の開始
1926 大正15	日本スケート会が 国際スケート連盟 (ISU) に加盟	1962 昭和37	女子世界スピード選手権で高橋かね子が1500m で3位入賞、戦後女子選手として初めての表彰 台。フィギュアで冬季ユニバーシアード大会に 初参加し、平松(上野)純子優勝、佐藤信夫が2位 1964 平松純子氏、インスブルック冬季五輪に出場 日本人女性初の旗手を務める
1927 昭和2	学連OBを中心に大日本氷上競技連盟が創立	1964 昭和39	男子世界スピード選手権で鈴木恵一が 500mで3連覇 インツェルの国際競技会で鈴木恵一が39秒2 の世界新記録をマーク 1969 アポロ11号が人類初の月面有人着陸
1928 昭和3	日本スケート会を中心に日本スケート連盟が 結成	1972 昭和47	第11回五輪冬季競技大会を札幌で開催 アイスホッケー部門が分離独立 1973 オイルショックが始まる 1976 ロッキード事件が表面化
1929 昭和4	大日本氷上競技連盟と大日本スケート連盟が 合流し、大日本スケート競技連盟を創立、よ うやく全国組織が一本化	1977 昭和52	世界フィギュア選手権を東京で開催し、 佐野稔が日本選手初の3位と健闘
1930 昭和5	大日本スケート競技連盟主催の 第1回全日本選手権開催	1978 昭和53	日本スケート連盟が社団法人として 法人格を取得 1978 日中平和友好条約を調印
1931 昭和6	大日本スケート競技連盟が 大日本体育協会に加盟	1979 昭和54	世界フィギュア選手権で渡部絵美が 日本女子初の3位
1934 昭和9	第7回明治神宮体育大会にスケート競技が 加えられ、スピード、フィギュア、アイスホッケー の3競技を実施	1980 昭和55	ショートトラックISU選手権で加藤美善 (500m、3000m)、加藤美佳(500m、1000m) が女子種目の完全優勝を分け合い、総合でも 1位、2位 1982 東北、上越新幹線が開業
1936 昭和11	大日本スケート競技連盟が日本スケート会に代 わり、国際スケート連盟のメンバーとして承認 1942 平松純子氏、兵庫県に生まれる	1984 昭和59	サラエボ五輪で北澤欣浩が500mで銀メダル、 スケート日本人初のメダル獲得 財団法人日本スケート連盟として認可 1984 香港が中国に返還される
1945 昭和20	終戦に伴い、大日本体育会の部会が解消され、 大日本スケート競技連盟も新組織で再出発 1945 第二次世界大戦が終戦		
1946 昭和21	大日本スケート競技連盟の戦後初の全国代表 委員会を開催、連盟の構成単位を地域別から 都道府県別に改組		
1947 昭和22	第1回国民体育大会スケート競技を戦後初の 全日本選手権大会を兼ねて八戸市で開催 1947 日本国憲法が施行 1950 朝鮮戦争が勃発		

1988
昭和63

カルガリー五輪で黒岩彰が500mで銅メダル獲得、橋本聖子は出場した全種目に入賞。ショートトラックは公開競技となり、獅子井英子が3000mで金メダル、男子500mで石原辰義が銀メダル、女子3000mリレーでは銀メダルと、合計3つのメダル獲得

1990
平成2

アジアスケート連盟設立

1992
平成4

アルベールビル五輪で橋本聖子が1500mで念願の銅メダルを獲得、男子500mで黒岩敏幸が銀メダル、井上純一が銅メダル、1000mで宮部行範が銅メダルを獲得。フィギュアでは伊藤みどりが女子シングルで銀メダル、ショートトラックは正式種目となり、男子5000mリレーで銅メダル獲得

1994
平成6

リレハンメル五輪で堀井学が男子500mで銅メダル、女子5000mで山本宏美が銅メダル獲得

世界フィギュア選手権で
佐藤有香が女子シングルで優勝

1995 阪神・淡路大震災が発生

1998
平成10

長野五輪を開催。清水宏保が男子500mで金メダル、1000mでも銅メダル獲得。女子500mで岡崎朋美が銅メダル獲得。ショートトラック男子500mでは西谷岳文が爆発的なスタートで金メダル、植松仁も銅メダル獲得

1998 平松純子氏、長野五輪で審判員宣誓を行う

2001
平成13

第56回新世紀・みやぎ国体・冬季大会からショートトラックが正式競技

世界距離別選手権男子500mで清水宏保が世界新記録を出し大会4連覇

2002
平成14

ソルトレークシティ五輪男子500mで清水宏保が銀メダル獲得

2006
平成18

トリノ五輪フィギュア女子シングルで荒川静香がアジアで初の金メダル獲得

2006 平松純子氏、フィギュア委員長に就任

2008 リーマンショックが起こる

2010
平成22

バンクーバー五輪男子シングルで高橋大輔が日本男子初となる銅メダル獲得、女子シングルスでは浅田真央が銀メダル獲得。スピード男子500mで長島圭一郎が銀メダル、加藤条治が銅メダルを獲得、女子チームバシュート(穂積雅子・小平奈緒・田畑真紀)は銀メダル獲得

2010 平松純子氏、国際スケート連盟理事に就任

2011
平成23

東日本大震災により東京での開催が中止となり急遽ロシアでの開催となった世界フィギュア選手権で安藤美姫が2度目の優勝、小塚崇彦が2位

フォトギャラリー



ガルミッシュ・パルテンキルヘン冬季オリンピックに12歳で出場した稲田悦子(1936)



母にレッスンを受ける上野(平松)純子(1953)



J.B.ジョイス氏(USAのスケーター)と共に。左端が上野衣子。右から3人目が上野(平松)純子(1954年頃)



全兵庫選手権に優勝(1955)



日本スケート連盟の会長を務めた竹田恒徳氏



兵庫県大会で審判を務める上野衣子(中央)(1955)



スコーパレー冬季オリンピックで日本選手団の旗手を務める(1960)



スコーパレー冬季オリンピック。左が上野(平松)純子。右が福原美和(1960)



スイスのピラルドで開催された冬季ユニバで優勝(1962)



スイスのピラルドで開催された冬季ユニバの表彰式(中央)(1962)



冬季ユニバ結団式にて。常陸宮様(右)と(1962)



コルティナダンペッツォで開催された世界選手権にて(1963)



切れの良いジャンプ(1963年頃)



アルベールビル冬季オリンピックで銀メダルを獲得した伊藤みどり(1992)



長野オリンピックで審判員宣言を務める(1998)



長野オリンピックではアシスタントレフリーを務める(中央)(1998)



長野オリンピックフィギュアで審判を務める(1998)

戦後フィギュア界の先導者 平松 純子



長野オリンピックの聖火ランナーと (1998)



アテネオリンピック壮行会にて。三宅義信氏 (前列左から2人目)、河西昌枝さん (後列左から3人目) 等と (本人は前列右) (2004)



アテネオリンピック日本選手団壮行会にて、JOC竹田会長 (右) と (2004)



オランダで開催されたISUのシングル&ペア、アイスダンス技術委員会 (右から3人目) (2004)



ソトレキシティオリンピックで男子の審判団と (前列右から2人目) (2002)



モロッコで開催された「IOC女性スポーツ委員会」会議にて。ロゲ会長 (左から2人目) と (2004)



ISU総会会場にて (2006)



2012年全日本フィギュア選手権女子シングル優勝の浅田 (中)、2位村上 (左)、3位宮原 (右)



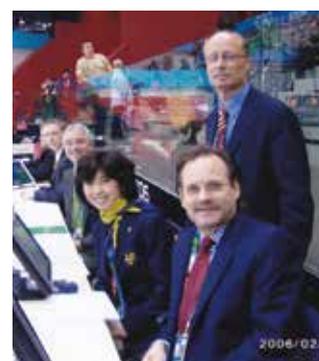
2012年全日本フィギュア選手権男子シングル優勝の羽生 (中)、2位高橋 (左)、3位無良 (右)



2013年2月に大阪で開催された四大陸選手権では、表彰式のプレゼンターを務める (前列右から2人目) (2013)



トリノオリンピックでチンクアンタISU会長 (IOC委員) (左) と。右はJOC竹田会長 (2006)



トリノオリンピックのペア競技。新採点法による技術役員Team (前列)、ISU事務総長F.シュミット氏 (後列) と (2006)